

蟬はぢん／＼なき立て、蜻蛉は樂しそくに、飛びまわつて居りました。阿屋は強い影を堤になげて、藤棚の下には散策の人々がごちゃ／＼と休息して居ります。其の中には懐しい赤い日傘も目受けられました。猫の毛の様にふさ／＼した一面の草原は、暑つい、いきりをぼつ／＼と吐き出して居る様で、もち竿を持つた小供が、そこ此處に、蜻蛉や蟬を、追ひまはして居ります。私は此の暑くるしくも、又、長閑なる光景に暫らく見とれて居りました。

翌日から其處へ晝架を据えました。極めて、呑氣に描いて見たいと思つて居りましたが、技巧の幼稚なのは仕方のないもので、とうとう、目茶目茶にこれ上げてしまいました。それでも十日ばかりは通つたでしょう。常識的な私には、やはり常識的な色しきや、見出せませんでした。

この様な、理想的の自然を眼前に控へて、大なる感興を以てやり始めながら、やつぱり努力主義一方の、つべたい繪にしまつたのは誠に慚愧の至りでムリです。(二月十六日)

新年會雜報

美津 廼家主人

本年は、前の水彩畫講習所が、日本水彩畫會と改稱せられて、専門の研究所となつてから、丁度五週年に相當するので、大々的紀念會を開かふといふ事は、大下先生御在世中、早く既に計

畫されて居つた事であつたが、不幸にして突如、不歸の客となられたので、豫定の計畫も、余程縮小し、只研究所だけで、内々に開かふといふ事になつた。けれども、餘興の有志連は、非常に熱心なもので、昨年暮の内より、早くも支度に取掛つて、劇の番組も、それ／＼決定されて、練習に着手した様であつたが、年が明けてからは、尙一層盛んに練習して、當日の到るを鶴首して待つて居る、仕末であつた。今日は其當日に成つたのである、月次會は延はした方が、よからふといふので、明日一所に開く事にして、午後一時より、新年會を開くといふ觸れ出しであつたが、開會前より、非常に多くの來會者で、余り廣くもない研究所は、到る處人で以て埋められて居る、會場なる二階の昇降口には「開會前二階に昇るべからず」といふ物々しい張札があつた、二階では、まだ頻りに小聲で試演をして居るらしい様子であつた、餘興の支度の都合で開會は、少し後れて、午後二時半といふに、一同を會場へ導いたが、忽ちにして一寸の空虚もなきまでに、満ちてしまつた、先生側には磯部、戸張、岡、大橋、永地、眞野、藤島の諸先生及大下正男君も、竹内久子氏と共に見へた、來賓の中には大洋畫會の茨木猪之吉氏、例の不折式の容顔いかめしく、座に就けるが、著しく目に立つた、僕が開會の辭を述べて、直に余興に移る、一同に渡つた。プログラムは、亦非常にハイカラで、時代の新風潮を汲む連中が、頻りに骨を折つた思考だけあつて、随分凝つたものだ、全頁殆んど英文でハーモニカ獨奏、及合奏、喜劇、正劇、夢幻劇、ダ

ンス、獨唱、盆踊り等、今日の番組を羅置してある、多少プログラムとは順序が變更されて、獨奏喜劇皿廻しと追々演じられたが、其御手製の道具建の大袈裟な事と、御手のものだけに、背景の見事な事には、少なからず驚かされた、窓には薄布を覆ひ、瓦斯の光りを用ひて、總て夜といふ思考である。何時の間にか、日は暮れて、晚餐も済んで、余興は益々佳境に入つて、研究所近所の人々迄、聞傳へて、詰掛ける様な仕末で、研究所あつて以來の盛況を呈した、加藤君の獨唱は、流石に異彩を放つて居つた、殊に女装の赤城君、アツコンパニストとして力められたので、一層引立つて見へた、大向ふから「イヨ御夫婦」は聞き馴れた誰やらの聲であつた、夢幻劇、正劇、いよ／＼出て

いよ／＼妙、わけて夢幻劇は、大成功で、淋しい／＼迷想を辿れる歳老ひし旅人の心持は、如何にもよかつた、それから「れんねえ旅籠」ダク／＼「平維盛」等とり／＼に面白く、觀者をして飽かず眺めしめた、男性に扮したる小山渡邊兩君、女性としては赤城、舟樹、寺田、後藤諸君の出來榮へは、中々見事なもので、殊に赤城君の女性振は、長髪だけに、無理な拵らへもなく扮装に於ては、一番引立つて見へた、河上君の皿廻しは、失敗が御愛嬌、望月君の盆踊り、皆それ／＼異彩を放つた、斯くて最後の余興を終へて、研究所の萬歳を三唱して、散會した時は、正に十一時であつた。

此日先生方も、諸君も、最後まで、座にあつて、飽かず眺められた事は、非常に嬉しく思つた。

若しも、本日大下先生が居られたならば、此の盛況を御覽あつて、如何ばかり喜んで下さつたであらふ、今日にして、それが得られないのは、返す／＼も遺憾の極みである。而し先生の御靈は、其最愛せられし遺物の發展を見て、蔭ながら頰笑んで、下さつた事と信ずるのです。

終りに余興に務められし、諸君の勞を多とする所であります。

新年會の前後

ス
エ

一の歡樂の爲に、私達は二ヶ月も前から、準備をしました。或日の午後でした。私とKさんと、江戸川へ寫生に行く途中でふつと私が

「Kさん。新年會に、あの(ねんねえ旅籠)をやつて見たいのですが、主人になつて下さいませるか。」

と云ひますと。Kさんは「私に出来るなら」と答へました。

それで其後、余興の話が出た時に、(ねんねえ旅籠)をやると云ふ事を申し出しました。

其時、いろ／＼ごた／＼したり、なにかしましたが、兎も角も、四つの戯曲が選定せられました。

其の四つと云ふのは(歡樂の鬼)(老いたる旅人)(平維盛)とそして(ねんねえ旅籠)でした。私は自分で買つて出た(ねんねえ旅籠)の妻の外に、(平維盛)の乳母臯月の役がつかました。

(ねんねえ旅籠)の主人の役は、始め相談した通りKさんでした。